

## 論 文

## ライプツィヒとザクセン銀

—— 国際商品取引・支払い大市の発展基盤としての鉱山業 (15世紀後半～16世紀前半) ——

菊池雄太<sup>†</sup>

## 要 旨

本稿は、近世の大陸ヨーロッパにおいて、とくに西欧経済と中東欧経済の結節点として重要な役割を果たしたライプツィヒの大市の発展基盤を、ザクセンの鉱山業に注目して明らかにしようとするものである。ライプツィヒの大市が他の競合大市都市から抜きん出て成長した要因をめぐっては、研究上すでに多くの見解が提出されてきた。ザクセン領邦君主による政策、商品取引・物流、支払い・決済、さらに鉱山業の発達などの諸点が指摘されている。このうち最後の点について、15世紀後半以降のエルツ山地における鉱山開発がライプツィヒの大市の成長にとって大きな刺激となったことは、かねてより認められてきた。しかし、それが具体的にどのようにして大市商業の拡大に結びついたのかについては、まとまった検討がなされていない。本稿は、大市発展をめぐる議論とザクセン鉱山開発の概要を確認した上で、鉱山業の発達が、大市の商品取引・物流機能と支払い・決済機能双方の向上を、直接・間接にさまざまな形で促したことを示した。

## はじめに

本稿の課題は、近世ライプツィヒ大市の成長基盤を検討することにある。ザクセン地方の商都ライプツィヒは、16世紀以降、18世紀にかけて、中欧における中心的国際大市都市に発展していった。定期市が近世においてもきわめて重要な商業制度であったこと背景は、次節で論じられるように、西欧経済と比較した場合に中東欧経済がもっていた構造的特徴の中で理解することができる。しかし、具体的には何を要因としてライプツィヒの大市が発達していったのかについては、さまざまな説明がある。

大市は交易機能を果たす場であるから、研究対象となるのは、主に交通や商品取引、支払いや決済といった商業的な側面に偏る傾向にある。しかし、成長の基盤として地域産業が果たした役割を無視することはできない。ライプツィヒ大市の本格的発展に先行する15世紀において、ザクセンの主力産業は鉱山業であった。本稿では、鉱山（銀山）業に分析の軸を据えて、それ

<sup>†</sup> 立教大学経済学部准教授 E-mail: ykikuchi@rikkyo.ac.jp

がライプツィヒ大市の国際商品取引や支払い決済とどのように関連していたのかを検出し、3者の一体性を浮かび上がらせる。まず第1節では、近世経済において大市というシステムが果たした役割を把握し、その中にライプツィヒ大市を位置づける。第2節では15世紀後半から16世紀前半にかけてのザクセンにおける鉱山業を概観し、第3節では鉱山業と大市の関係について検討する。

## 1. 大市の発展をめぐって

F. ブローデルが活写したように、近代以前の世界における交換活動は市を中心<sup>いち</sup>に営まれ、その中で大市は18世紀に至るまで遠隔地商業の中核的制度であり続けた（ブローデル，1986）。このような定期市システムが維持されていたのは、大市のいかなる機能によるものであろうか。

A. プレシとO. フェールタークによれば、

「大市は中世商業の象徴のようなものである。[.....] 大市は時間・空間の点で需要と供給を集中させ、たえず移動している「ほこりまみれの足」の商人たちに、便利で確実な出会いの場を提供した。シャンパーニュの大市の有名な例は、中世大市のこういったさまざまな機能をはっきりと例証している」（プレシ/フェールターク，2000，73）。

すなわち大市は、中世の、とくに商人が積荷とともに各地を移動していた時代の交易条件に適していたという。D. C. ノースとR. P. トマスの見方を借りれば、情報伝達技術が未発達で、取引頻度も少なかった当時において、定期的な市は費用面で効率的な制度であった（ノース/トマス，2014，78）。

ノースとトマスの見立てでは、13世紀以降の都市の発達と商業の恒常化に伴う市場情報費用の低減により、定期市の重要性は失われていくという。プレシとフェールタークの叙述においても、シャンパーニュの大市の衰退後の時期については、商業において都市の果たした役割が前面に押し出されている。すなわち、これらの著者は、シャンパーニュの大市を旅する商人の時代の商業を支えた制度として位置づけ、かつそれを大市商業の典型として把握しているのである。一方でO. フェアリンデンは、シャンパーニュの大市が13世紀までの商業形態に不可欠であったことを認めつつも、14世紀以降も多数の年市ないし大市がヨーロッパ各地で盛んに開催され<sup>1)</sup>、地域内

1) 年市と大市（ドイツ語ではJahrmärkteとMesse）は、中近世の史料において一定の基準で使い分けてはいないため、両者を明確に区別することは基本的に困難である。この点についてはN. ブリュバハが詳細に論じているが（Brübach, 1994, 25-42），ここでは漠然と、より国際的な性質をもった中心的な歳の市を大市とみなしたい。

および地域間の商業サイクルを結びつけていたことを指摘する (Verlinden, 1963, 137-153)<sup>2)</sup>。すべての需要を満たすような恒常的商業が実現できたのは、都市生活がとくに進展した北フランスや低地地方の一部に限られ、その他の地域では、むしろ定期市が数と重要性において増加をみた。とくに注目されるのが、その発展方向が東へ向かっていったという事実である。これが含意するのは以下のことである。すなわち、西欧地域で経済がより高度化し工業が発達していく中、一次産品を産出する中東欧地域がそれに商業的に結びつけられるようになる。その際に、後者では都市生活が進展していなかったために、年市や大市が必要とされ、実際に創設されていったのである。

この点に関して、ブローデルは次のように述べる。

「大市は交換の旧式な形態なのである。テュルゴーの時代において、それはなお人に幻影を与えることはできず、役に立ちさえした。しかし、それが競争相手を持たない場所では経済が停滞状態に陥っているのである。17・18世紀におけるいくつかの大市の隆盛はそれによって説明できる。多少地位は低下したがなお活発なフランクフルトの大市。ライプツィヒの新しい大市・ポーランドの大規模な大市群、[.....] またガリチアにおいて。[.....] そしてロシアの途方もない規模の大市」(ブローデル, 1986, 99-100)。

かつて M. ヴェーバーは、大市から常設取引所への移行をもって、近代的(卸売)商業の誕生としたが(ヴェーバー, 1955, 142-145)、ブローデルは、18世紀では「旧式な形態」である大市が、取引所と並存して商業の中核を成していたことを指摘する(ブローデル, 1986, 84)。大市の役割に関して上段で行った議論も踏まえてみれば、大市は中世後期から18世紀に至るまで、商業システムや技術の高度化の度合におけるヨーロッパ東西の地域ギャップを埋める機能を担っていたという基本認識が導けよう<sup>3)</sup>。

ドイツ地域における大市の東漸過程の中で、ヨーロッパの東西を結節する代表的大市に成長した都市が、ザクセン地方に位置するライプツィヒである。同市の興隆は、上述の説明——ヨーロッパ東西の地域ギャップを埋める機能——に当てはめることが可能である。ライプツィヒの大市は17世紀後半から18世紀、すなわち同市より西に位置するフランクフルト・アム・マインの大市より遅れて発展し、オランダやフランスの諸都市やハンブルクといった経済中心地、さらにイタリア・地中海などの地域を、とりわけロシアやポーランド、ハンガリー、ボヘミア等の中東欧地域につなぐ結節点となったのである (Denzel, 2012)。

---

2) J. Schneider も、パリやロンドン、ブルッヘ等の都市の恒常的商業に並んで、ジュネーヴやリヨン、ジェノヴァにおける大市商業が、シャンパーニュの大市に取って代わったとしている (Schneider, 1989, 50-55)。

3) これは谷澤毅の把握と共通する (谷澤, 2010, 193)。

しかしここで留意すべきは、順調に発達した大市がある反面で、創設後に短期間で衰微した、あるいはごくわずかな役割しか果たさなかった大市が少なからぬ数に及ぶことである (Henn, 1996)。また、大市相互の競合も激しく、大市都市は生き残りをかけて他都市と争わなければならなかった<sup>4)</sup>。それならば、いかなる要因でもって特定の大市が発展することになったのか。ライプツィヒに関して、先行研究が一致して重視しているのは、政策的な側面である。すなわち、領邦君主による大市の保護育成が、ライプツィヒの大市が他都市から抜きでるのに決定的な役割を果たしたという<sup>5)</sup>。

商業的機能をめぐる議論について、論点を整理してみよう。商品取引の場、すなわち商品大市としての側面を重視するのであれば、交通路・通商網の発達と交通量・商品取引の展開に関心が向かうであろう。その代表は M. シュトラウベであり、ライプツィヒがヨーロッパの東西南北を結ぶ交通・交易の結節点であったことが、その大市の成長の第一義的な要因であったと強調する (Straube, 1979; 1997a; 2015a)。日本では谷澤毅がこの視角からライプツィヒ大市の発展を論じている (谷澤, 2000; 2002)。一方で、近年ドイツ経済史、とりわけ金融史と大市史研究をリードしている M. A. デンツェルは、ライプツィヒの支払い、決済機能を重視する (Denzel, 1999; 2018)。一般に大市は、商品取引に伴う支払いの必要性から決済中心地としての役割を担うようになり、開催期間の最後に諸々の取引の清算がなされた。さらに遠隔地間の取引決済に為替の利用が普及すれば、手形取引がジェノヴァ、リヨン、ブサンソン、ピアチェンツァといった特定の国際大市に集中し (Schneider, 1991, 135-138)、金融を主要業務とする専門的大市が発達する。とくにジェノヴァでは商品取引・支払い決済大市から為替業務に特化した大市が生まれた (Schneider, 1989, 52)。一方でライプツィヒは、商品大市と支払い・決済大市双方の側面を併せ持ち、「東方地域と行う商品取引のための、超地域的な精算の場であった」(Brübach, 1994, 469)。中東欧では商業制度・技術が未発達であったために、金融に専門化した大市の必要性は低く、むしろ商品取引と支払い・決済が一か所で行われる方が合理的であったのであろう。また、デンツェルによれば、ライプツィヒの大市は現金取引ベースの東欧地域と、非現金決済に習熟した西欧とを結ぶ仲介役を担った (Denzel, 2012, 102)。商業システムの発展度合におけるヨーロッパ東西の地域ギャップを埋めるというライプツィヒ大市の上述した機能が、金融面からも看取される。

以上をまとめると、ライプツィヒ大市の商業発展をめぐる研究史は、とりわけ商品取引・物流 Handel und Verkehr の集散機能と、支払い・決済 Zahlungsverkehr の仲介機能を両輪として重視し、議論を積み重ねてきたと言えよう。それに対して本稿は、第三の軸として、地域

4) ライプツィヒの大市は、1458年に新年の大市開催特権を皇帝から付与されて以降、数十年にわたりハレ、ナウムブルク、マクデブルク、エアフルト等の諸都市の大市と激しく競合していた (Denzel, 2012, 96)。

5) この点に関しては、とくに Blaschke, 1999を参照。

産業基盤，具体的にはザクセン鉱山業との関係を取り上げる。かつて E. クローカーは、ライプツィヒ大市の急速な成長とザクセン鉱山（シュネーベルク銀山）の開発が時期的に一致していたことを指摘し、後者が前者の最大要因であったとみなした（Kroker, 1909, 32；1925, 64）。今日でも鉱山業は大市発展の主要因のひとつに数えられているが（谷澤，2010, 185-186）、この側面に焦点を絞った研究に乏しい。とくに、鉱山業が具体的にはどのような形でライプツィヒ大市の発展と結びついたのかについては、まとまった考察が欠けている。本稿では、地域産業、商品取引・物流、支払い・決済という3つの軸の密接な相互関係を重視する立場をとる。すなわち、ザクセンにおける鉱山業の展開と、大市の商品取引集散機能および支払・決済仲介機能の発達との具体的な関連を検出することに重きが置かれる。それは、大市発展の動態をより包括的・構造的に把握することに資すると考えられる。

## 2. ザクセンの銀山開発

ドイツ地域の中で早期に鉱山業が発達したのはニーダーザクセンとザクセンであり、10世紀のオットー1世時代にまで遡る。とりわけハルツ山地ランメルスベルク鉱山で産出される銅および銀は10世紀から12世紀に至る頃までにはヨーロッパにおける産出で支配的な地位を占めるようになり、鉱山都市ゴスラーは経済的繁栄を享受した（Kellenbenz, 1977, 107；Beddies, 1996, 83-84）。ザクセン地方では、ミットヴァイダ Mittweida やフランケンベルク Frankenberg, さらにビーンズドルフ Biensdorf, フランケンブルク Frankenburg などにある鉱山が開発されていったが、もっとも重要となったのがエルツ山地（エルツゲビルゲ）北部の銀山都市フライベルク Freiberg である<sup>6)</sup>。1168年に鉱床が発見されてからマイセン辺境伯オットー・フォン・ヴェッティンにより採鉱の奨励が進められ（瀬原，2016, 31-32）、13世紀には同市からイタリアやフランドル、ハンブルクへの銀輸出が確認できる（Unger, 1963, 67-68）<sup>7)</sup>。14世紀に入るとフライベルクはシュターペル権によりベーメンとの中継交易を押さえ、また北東方向へは取引関係をバルト海地方のシュテティンにまで伸ばした（Unger, 1963, 75-82）。鉱山業を基盤として、フライベルクは当時のザクセン地方の交易中心地にもなっていったといえよう。

フライベルクの鉱山業は、露出鉱脈が枯渇した上、技術的問題と資本不足が相まって堅抗採鉱が成功しなかったことにより、14世紀中頃から衰退し始める（瀬原，2016, 32；Laube, 1976, 12）。しかしすでにその頃から南西の上エルツ地方で銀山開発が進められており、15世

6) フライベルクおよび以下本稿で挙げられる地名とライプツィヒとの位置関係、さらに交易路については本稿末尾の図2を参照。

7) とりわけフランドルとは毛織物が交換された。またハンブルクへは錫の輸出も大きな位置を占め、帰り荷としては毛織物のほか、ニシンが挙げられる（Unger, 1963, 70-71）。

表1 シュネーベルク銀産出量 1471～90年

(単位：銀重量マルク)

年	産出量	年	産出量
1471	12,740	1481	10,591
1472	29,409	1482	15,802
1473	5,106	1483	12,074
1474	32,996	1484	27,916 *1
1475	13,257	1485	6,202 *2
1476	38,454	1486	13,154
1477	77,352	1487	8,415
1478	31,176	1488	8,722
1479	24,802	1489	3,606 *3
1480	48,903	1490	8,329

(出所) Laube, 1976, 268.

(\*1) 1483年11月22日から1484年9月までの産出量を示す。

(\*2) 1485年8月から1486年2月までの産出量を示す。

(\*3) 半年分の情報が欠落している。

紀には同地方が銀産出の主力となっていく<sup>8)</sup>。その中で筆頭に挙げられるのがシュネーベルク Schneeberg である。同地での銀鉱採掘について史料で確認できる最初の年は1446年であるが、1470年に大規模な鉱床が発見され、同年118重量マルクの銀が獲得されて以降<sup>9)</sup>、産出量は急激に増大する。1471年から1490年にかけての毎年産出高は、表1に示すとおりである。

鉱山開発は、15世紀のザクセン領邦君主財政の維持にとってきわめて重要であった。本稿注8で指摘したように、世紀前半ではフス戦争やザクセン兄弟戦争による戦費支出が急速に増大したと考えられる。兄弟戦争を通じてザクセンの支配領域がアルベルティン系とエルネスティン系に分割される中で領域国家が形成されていくと、官僚機構への給与支払いや支配地の購入、また、次節で取り上げるように、宮廷消費のための貨幣需要が増大し、財政収入拡大の必要性が高まった (Laube, 1976, 8-10; Groß, 2012, 30-33)。そのため大きな役割を担うようになったのが、シュネーベルク鉱山からの収益であった。領邦君主が有する鉱山高権を背景に10分の1税が徴収されたほか、銀の買い上げ権と造幣高権を結びつけることで、大きな利益が実現できたからである。すなわち、流通貨幣を製造する権利を掌握していた領邦君主は、そのための原料貴金属たる銀地金を市場におけるよりも低い価格で独占的に買い上げ、銀地金購入

8) Dietrich, 1991/1958, 7-25を参照。フライベルク鉱山業の衰退は、15世紀前半にフス戦争やザクセン・ヴェッティン家内での抗争(兄弟戦争 Bruderkrieg)での支出に苦しむ領邦財政を圧迫した。しかしそのことは、領邦君主が新たな収益源の確保を目指しフライベルク以外の土地での鉱山開発に向かう誘因ともなった (Laube, 1976, 12-15を参照)。

9) 1マルクは233.58グラムに相当する。Laube, 1976, 269.

表2 アンナベルク銀産出量 1491～1520年

(単位：銀重量マルク)

年	産出量	年	産出量	年	産出量
1491		1501	26,833	1511	17,717
1492	722	1502	25,587	1512	17,517
1493	367	1503	27,811	1513	29,077
1494	840	1504	23,449	1514	23,544
1495	2,650	1505	22,580	1515	10,150 *1
1496	2,176 *1	1506	20,972	1516	10,687 *1
1497	9,701	1507	18,389	1517	26,029
1498	12,132 *2	1508	19,138	1518	16,783
1499	13,300	1509	20,190	1519	12,274
1500	12,708 *1	1510	20,796	1520	11,711

(出所) Laube, 1976, 268.

(\*1) 半年分の情報が欠落している。

(\*2) 半年分の産出量が鉱山都市ガイエル Gayer のものとまとめて計上されている。

価格と造幣金額の差を収入として得ることができた (Laube, 1976, 77-78; 瀬原, 2016, 75)。

鉱山からの利益が領邦君主財政全体に占める割合は、1470年代から1480年代初頭にかけて急激に増大した。1473年時点では、ザクセン選帝侯 (エルネスティン家) 収入総額45,508グルデンのうち鉱山からの利益 (ネット) は8,440グルデンで、18.6パーセントであったが、1478年から1482年の平均では81,225グルデン中の37,000グルデンとなり、全体の45.6パーセントとなるに至った (Schirmer, 2006, 122)。また、ザクセン公 (アルベルティン家) 財政に占める鉱山収入は、1488年から1496年の平均で73,073グルデン中の9,577グルデン、すなわち13.1パーセントを占めていた (Schirmer, 2006, 161)。

1470年の大規模鉱床発見の知らせは直ちに周辺に伝わり、鉱山業関係者たちをシュネーベルクに引きつけた。1476年には居住地が冊で囲まれ、同地の都市的発展の端緒がみられるようになったことが、史料上確認される。その後の都市発展は領邦による鉱山の官僚組織的管理体制の確立と軌を一にして進行した。1477年に鉱山令条例 Bergordnung が発布され、また独自の鉱山長官 Hauptmann が任命された。1479年には鉱山裁判所と都市裁判所の統一がみられたが、この時点では都市法を得るには至っていない。しかし都市的共同体は存在していたと考えられ、また居住者の中にはすでに賃金労働者がいたようである (Laube, 1976, 22-26)。

1470年代後半から80年代前半までのシュネーベルクは驚異的ともいえる高い銀産出高を示したが、ピークの後に収束期を迎えた。それに代わるように1490年代末からはアンナベルク Annaberg の銀産出が増大していく (表2)。アンナベルクでは15世紀前半に銅山が開発されるが、やがて銀採掘が主要になる。有望な銀脈が発見され、10分の1税の徴収記録が残された

のが1492年のことであった (Laube, 1976, 31; 瀬原, 2016, 34)。1490年代から16世紀初頭にかけて同市は急速な発展をみる。1509年には8,000人以上の居住者を有したとされ、これは当時のドレスデンを凌ぎ、ライプツィヒに比肩していた (Laube, 1976, 34)。さらに、16世紀前半にマリーエンベルク Marienberg が主要採掘地の列に加わる。とくに1530年代末以降、アンナベルク銀山業が後退した際に、マリーエンベルクの産出高が著しく増加した。

### 3. ザクセン銀山業とライプツィヒ大市の関係

前節でフライベルクの例において指摘したように、銀山業の発展は、産出した銀の取引を担う都市の商業発展と密接に結びついていた<sup>10)</sup>。ライプツィヒに関して言えば、第1節で述べた通り、E. クローカーがシュネーベルク鉱山業の隆盛をライプツィヒ大市の興隆の第一要因とみなした。ただし、近年になって M. シュトラウベが、その因果関係について修正を加えている。彼によると、シュネーベルク銀山業に投資したライプツィヒ市民のほとんどが、かねてよりライプツィヒの商品大市で取引を行っていた商人であり、他所から同市に移入し、市民権を獲得していた者たちであった。つまり、ライプツィヒではまず商品取引が先行して発展し、そこで蓄えられた資本が鉱山業に投下されたのだという (Straube, 2015b, 322-329)<sup>11)</sup>。

初発時点の因果の順に関して古典的理解の再検討が必要であったとしても、鉱山業の発展が大市発達のための重要な刺激となったという見方に異論が唱えられたわけではない<sup>12)</sup>。そうであるならば、この相互関係の具体的なメカニズムを整理して把握する必要がある。銀山業から発せられるいかなる要因が、どのようにして大市の発展に帰結したのであろうか。

#### (1) 銀取引・銀山投資・精練所経営

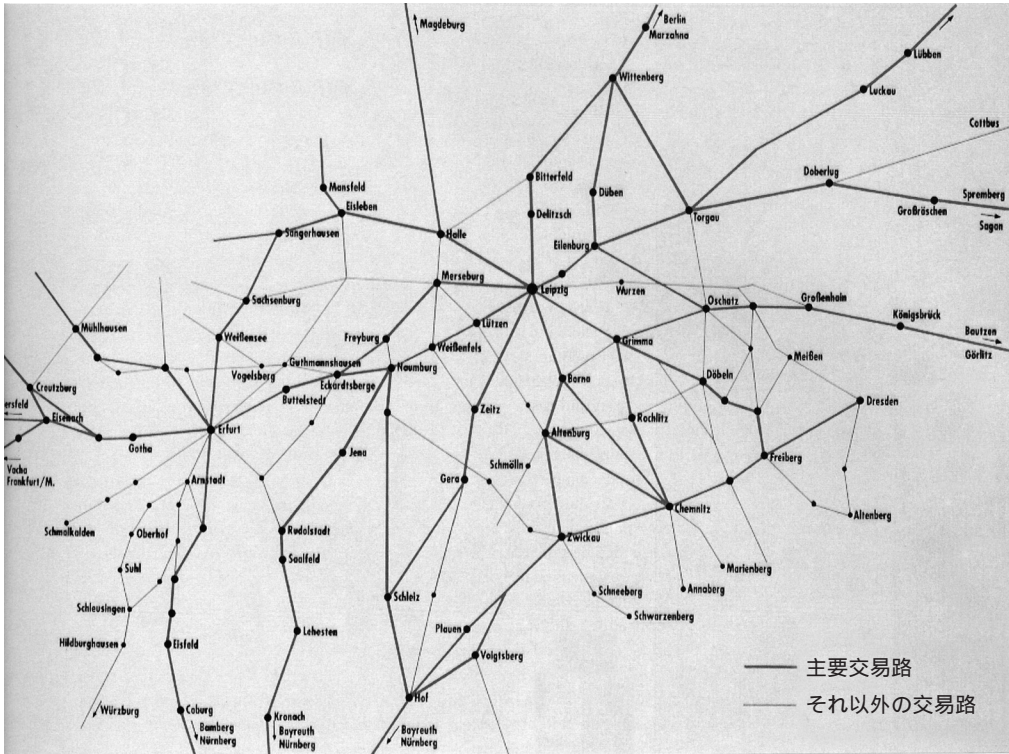
考えられる要因としてもっとも単純なものは、大市での銀取引であろう。それでは、産出銀は大市でどの程度売買されたと考えられるであろうか。上述したように、領邦君主は鉱山から獲得された銀の買い上げ権を有していた。しかし、貨幣政策上の観点、すなわち造幣素材を確保する必要から、市場への銀供給には抑制的であった。また1470年代初頭以降、財政上の観点から、領邦君主が銀の買い上げを実施し続けることは困難となった (Schirmer, 1999, 97)。それに加え、個々の販売業務をすべて実行することは不可能であったので、少数の人間に銀の取引を引き受けさせる必要があった (Fischer, 1929, 37)。そのため銀の買い上げはツヴィッ

10) フライベルクで銀山業が衰退したことで、ザクセン地方の中心的商業都市は15世紀に同市からライプツィヒへと移行した (Unger, 1963, 84)。

11) この点については、A. ラウベの古典的研究も、南ドイツやザクセン諸都市の商人による商業資本の蓄積がザクセン鉱山業発達に先立つことを明言している (Laube, 1976, 5-8)。

12) 以下で述べるように、シュトラウベ自身も両者の相互関係を重視する立場をとっている。





(出所) Straube, 1997a, 23.

図1 ライプツィヒの市場圏における交易路と諸都市

カウ商人のマーティン・レーマーに委託された<sup>13)</sup>。ただし当初銀の大部分はフランクフルト・アム・マインの大都市で売却されていた。この時点で重要なのは、大都市での直接的な銀取引よりも、銀を通じて南ドイツ商家とのコンタクトが築かれていったことであろう。すなわちレーマーは、ニュルンベルクの市民であるハンス・ウンベハウエンを同市における代理商としていたのである (Schirmer, 1999, 93)。

レーマーの死後、つまり1483年以降に、ザクセン銀の取引はライプツィヒの大都市に移行した (Schirmer, 1999, 98)。彼の業務は上述したニュルンベルクのウンベハウエンとライプツィヒのマティアス・ツォーベルシュタインに引き継がれ、前者が南ドイツ・イタリア方面の、後者がライプツィヒ方面での銀販売を行ったと考えられる (Laube, 1976, 130)。フランクフルト

13) マーティン・レーマーに関しては Laube (1976), 126-131を参照。金融業を通じてザクセン領邦君主との関係を構築し、そのことにより銀山業における特別の厚遇を受けるようになった。シュネーベルク銀山の開発により大きく財力を拡大し、銀取引も積極的に展開した。

・アム・マインの国際銀市場はなおもその地位を維持し、またおそらく1480年代以降、あるいは遅くとも16世紀初頭から、エルネスティン家により銀の売却が制限されるようになったが、U. シルマーによれば、それでもライプツィヒは銀取引の中心地としての地保を固めていったという (Schirmer, 1999, 98)。

上述したように、ザクセンの領邦君主は貨幣政策上の理由から、市場への銀供給を基本的には抑制していた。しかし16世紀初頭にはアルベルティン家の債務返済のために、同家による銀売却が行われていた。また1511年から1515年にかけて、エルネスティン家がエルツ地方の銀をライプツィヒの大市で比較的継続的に売却していた。4,498重量マルクと11ロート、価額にして38,250グルデン相当の銀であり、これはエルツ地方の年間総産出量の0.96パーセント (1515年) から4.1パーセント (1512) に当たる (Schirmer, 1999, 98-99)。

以上確認されるように、ライプツィヒ大市が銀の売買が行われる場として機能していたことは確かである。しかし、ザクセン領邦君主が銀の先買い権を有していた上に、市場への銀売却は抑制されていたため、たとえザクセン銀のすべてが造幣のために消費されたわけではなく各地域に広く売りに出されていた (瀬原, 2016, 88) としても、大市での大規模な銀取引が継続的に行われていたとは考えにくい。銀の直接的な取引以上に強調すべきは、鉱山株取引であろう (Denzel, 2018, 417)。シュネーベルクに新たな銀鉱床が発見された知らせは多くの人々の投機的関心を掻き立てたとみられ、ライプツィヒでは商人をはじめさまざまな富裕層、また小口分割をすることで資産規模の小さな市民が鉱山株への投資を行い、さらに1472年には市参事会、1477年にはライプツィヒ大学哲学部までもがそれに加わることで、銀山開発は「投資ブーム」の様相を呈していた (Kroker, 1925, 54-56)<sup>14)</sup>。シュネーベルク鉱山株取引は、フランクフルトとライプツィヒの大市で大規模に行われていたという (Brübach, 1994, 421)。

さて、本稿が主眼を置くのは、ライプツィヒが地域的な市場の枠組みを越えて国際性をもつ大市として発展していく原動力としてザクセン鉱山業がどのように位置づけられるのかという点であった。この文脈において重要なのは、こうした銀取引や鉱山株取引の発展を通じて、他地域の経済中心地との結びつきが拡大ないし強化されていったことであろう。すでに言及したように、銀の販売を委託された商人によって、ライプツィヒとニュルンベルクとの関係が築かれていった。

中世末期から16世紀にかけてのニュルンベルクは、当時のドイツ地域最大に数えられる製造業 (金属加工業および繊維業) を有すると同時に、広域な商業および資本進出を展開し、とりわけ中東欧経済では研究上「ニュルンベルクの時代」と称される大きな影響力を及ぼしてい

---

14) 鉱山株の価格は坑口の産出高や評判によって異なっており、たとえばシュネーベルク鉱山で大規模な採掘が行われていた1477年に、当地の坑口ごとの鉱山株価格は600グルデンから2,400グルデンに設定されていた (Wagenbreth / Wächtler, 1990, 97)。

た<sup>15)</sup>。ライプツィヒも15世紀後半以降にニュルンベルク商人の進出を受けたことが、その後の発展を強く規定したと考えられる。1471年から1550年にかけて、ライプツィヒでは計281人の外来商人が市民権を獲得したが、出身地が判明する165人中の79人が南ドイツ出身であり、そのうち36人がニュルンベルクに出自をもっていた (Fischer, 1929, 18-33)。この数は、判明する出身都市の中では最大である。そして、このような商人が強い関心を寄せたのが、鉱山業であったと考えられる。

上述のように、1511年から1515年にかけてライプツィヒの大市で大規模な銀販売が行われたが、それを購入した商人の属性は示唆的である。確認される33人の商人の所属先として12都市が挙げられ、購入高で最大の割合を占めたグループはライプツィヒ商人であった。注目されるのが、このライプツィヒ商人たちの中には南ドイツまたはフランケンの出身者がみられ、従来からの地元商人は全体の一部に過ぎなかったことである (Schirmer, 1999, 99)。南ドイツ商人の中で筆頭に立つのが、ニュルンベルク出身のハインリヒ・シェールであった。彼は1475年にニュルンベルクのそれほど裕福ではない家庭に生まれ、1506年にライプツィヒで市民権を得た。1508年以降、雑貨商組合 *Kramerinnung* に属し、絹の小売りを行うと同時に、ニュルンベルク商人との関係を活かしてヴェネツィアの繻子織、ダマスク織の卸売業を営んだ。そこで形成された富を資本として、鉱山業への進出がなされたのであろう。彼はとりわけ、1520年代から1548年に死亡するまで、マンスフェルト銅山業へ活発に参与したことで知られる<sup>16)</sup>。それに先行する1510年代、シェールは上述の1511～1515年の5年間にライプツィヒ大市で販売された銀の12.24パーセントを購入していた (Schirmer, 1999, 99)。

ニュルンベルク商人の移入は、ライプツィヒの銀売買市場を活性化させただけではない。銀売買や鉱山株取引には、遠隔地との支払い・清算や資本移動のための取引技術、信用制度などが必要とされたが、それらはハンガリーやチロルの銅山業で経験と知識を培ったニュルンベルク商人たちによりライプツィヒに移転され、また同市の大市はそのような移転に応える場であった (Brübach, 1994, 420)。このようにして事業契約、信用取引、年次清算が行われるようになったことは、大市の発達にとって決定的に重要であったと考えられる。また、より一般的には、ニュルンベルクを中心とした南ドイツの商人は、自らの血縁関係や出身地における取引関係を基盤にライプツィヒで事業を拡大し、それが同市の経済力、ヨーロッパ商業における拠点性の強化につながっていったことが指摘できる (谷澤, 2002, 35)<sup>17)</sup>。

15) こうした諸相については、Lütge, 1967; Ammann, 1970; 瀬原, 2011a; 2011b を参照。

16) ハインリヒ・シェールについての以上の記述は Fischer, 1929, 141-147 に基づく。

17) ニュルンベルクでは中小商人であった者が、ライプツィヒに移住したことにより事業拡大に成功し、富裕になる場合もあった。Fischer, 1929, 13 を参照。上述のハインリヒ・シェールは、ライプツィヒ移住後初期の情報に欠けるが、出自がニュルンベルクの富裕とは言えない家であるため、このケースに属するものと考えられる。

## (2) 人口増大と鉱山都市の発展

新鉱床の発見は、噂となって瞬く間に各地に広まり、多くの人びとを引きつける。歴史上著名なのは、19世紀中頃のカリフォルニア金鉱発見による「ゴールドラッシュ」であろう。中世のドイツ語地域でこの現象は「鉱山の呼ぶ叫び Berggeschrey」と呼ばれ、1168年のフライベルクの銀鉱床発見が最初であるという (Ingenhaeff/Bair, 2010, 30)。

こうしてザクセン・エルツ地方では、銀の産出が知られる前までは人口過疎であった地域に、鉱山開発による富の獲得、生業の機会を見出した人びとが押し寄せ、坑口周辺に集住するようになった。鉱山地域の人口数を正確に把握するのは困難であるが、15世紀末から16世紀初頭頃のエルツ地方では50,000～70,000人ほど見積もられている (Straube, 1997b, 205)。この数値は当時のザクセン地方ではきわめて高いといえ、しかも人口増は急速に進んだ。このことは、ザクセン地方の都市流通ネットワークには大きな影響を与えたと考えられる。すなわち、採掘に従事する人びとに対して食糧や燃料、衣服その他の生活物資を供給する必要が生じた。鉱山地帯での自給は不可能であったので、物資は外部から確保しなければならず、そのための集配機能の担い手として都市が発展することとなる。こうして鉱山都市が、採掘銀の集荷・輸送に加えて生活物資の流通拠点となることで著しい成長を遂げていった。

表3が示す鉱山都市の人口増加は、上段のような発展を明確にあらわしている。12世紀中葉以降に「シルバーラッシュ」が起きていたフライベルクは、1300年頃の段階ですでに多くの人口を有しており、1550年頃にかけての人口増加率は高くはない。表中でもっとも顕著な人口増をみせるのが、1490年代末に銀産出が本格化したアンナベルクである。マリーエンベルクは1530年代から銀の産出でアンナベルクを上回っていくが、すでに1550年頃の時点で大きな人口増加が確認される<sup>18)</sup>。

エルツ山地で急増した人口を扶養するために遠隔地から物資の供給がなされたことは、数量情報に基づく史料の裏づけがなされている。M. シュトラウベは、ザクセン地方都市ボルナ Borna, アルテンブルク Altenburg, ゲルステンベルク Gerstenberg の「荷車護衛料徴収書 Geleitsrechnungen」を分析し<sup>19)</sup>、16世紀初頭におけるエルツ山地向け穀物流通の実相を明ら

18) 鉱山諸都市の人口増加率の高さを理解するために参考となる比較数値として、ザクセン地方の経済的・政治的中心都市の場合を示せば、ライプツィヒの都市人口は1300年頃に3,850人であったものが1550年頃に10,318人に(168パーセントの増加)、ドレスデンでは3,800人から27,583人(626パーセントの増加)になっていた。また、ザクセン全体の人口は、同期間中に50パーセント増加した。数値の出所は表3と同じ。

19) 護衛料とは、領域支配者により領内を移動する人びとから徴収された保護手数料である。「護衛 Geleit」はザクセンシュビーゲルに言及がみられ、ライプツィヒに関しては、1268年にはランツベルク方伯ディートリヒが同市の市場を往来する商人に対して出した保護特権が最初の記録である。一部の、とくに貴顕な人びとに対しては護衛の随行がなされたが(生きた護衛)、大多数をなす一般の人びとに対しては書面が発行されたのみであった(文書の護衛)。護衛料は荷車または積載商品に対し

表3 鉱山都市人口の増加 1300年頃～1550年頃

(単位：人)

	1300年頃		1550年頃		増加率 (%)	
	都 市	管区全体	都 市	管区全体	都 市	管区全体
フライベルク	5,500	16,850	9,015	25,394	64	51
アンナベルク	450	6,479	12,371	19,232	2,649	197
マリーエンベルク	750	5,223	5,839	12,085	679	131

(出所) Blaschke, 1967, 70, 78.

かにした (Straube, 1997b)。これらの都市を通過した穀物積載荷車の多くは、ケムニッツ Chemnitz やツヴィッカウ Zwickau などのエルツ山地へ連絡する幹線沿いの都市や、シュトルベルクのようなエルツ山地の都市を目的地としていた。1525年5月から11月の間で6,500トンの穀物輸送があったと推計され、これは年間30,000人の消費量に相当する。

鉱山地区に外部から供給されなければならないものは、穀物に留まらなかった。銀という単一生産物に特化した地域に人口が集中していたのであるから、外部からの供給に依存度が高い物資の種類は広範に及んでいたであろう。魚類や肉類、塩、ビールなどの基礎的な食糧・飲料のほか、人びとの日常生活および労働生活に用いられる工業製品、たとえば毛織物や麻織物、皮革類など、さらに坑道や採掘場の照明には獣脂が必要であった。このような多様な需要に合わせて、ザクセン地方の物流システムが整備されていったと考えられる。そしてそれは、ライプツィヒの市場がザクセン地方内外の各地から物資が集散する拠点として発展していく重要な要因となったはずである (Straube, 1997a, 22)。たとえば1525 / 26年の護衛料支払い記録には、穀物を積載した大型荷車は1,579台みられるが、そのうちの350台が穀物の出荷地としてライプツィヒを挙げている (Straube, 1997b, 208 209)。

### (3) 領邦君主財政と商品購入および決算

上述したように、銀山業は領邦君主財政の重要な収入源となり、銀山からあがる収益が財政に占める割合は15世紀末に顕著に増大し、1480年前後の時期にはザクセン選帝侯 (エルネスティン家) 収入総額のうち約45パーセントを銀山収益が占めていた。このことも、ライプツィヒの大市の興隆に役割を果たしたと考えられる。

それを明らかにするために、財政支出の内訳に目を向けてみたい。表4は、ドレスデンのザクセン選帝侯宮廷における支出が項目別にまとめられたものである。1473年と1481 / 82年のふたつの決済年度で比較ができるが、数値を読む際に注意すべき点がある。アルベルティン家とエルネスティン家により共同統治されていたザクセンは、1485年に分割されることになるが、

て課されていた。Straube, 2015b, 39 42.

表4 ザクセン選帝侯宮廷支出構造 1473年・1481/82年  
(単位：グルデン)

	1473年	1481/82年
調理場・食物貯蔵室	7,603	3,124
地下貯蔵室	3,808	940
ライブツィヒ大市	5,979	7,667
婦人部屋	769	429
カラスムギ購入	2,421	2,261
厩舎・馬	6,108	?
装 蹄	95	112
建 物	?	3,441
小 銃	?	846
養魚池	?	1,037
ブドウ園	?	50
絹・金細工	318	?
廷臣・女官	127	?
使者報酬	226	267
士官俸給	421	714
手工業者報酬	150	146
教会献金	51	81
旅行・小宿営	2,834	482
合 計	30,970	21,597

(出所) Schirmer, 2006, 127.

それに先立つ1482年に、宮廷運営が分離された。これは宮廷規模が縮小されたことを示している。表中でそれと密接に連動したのが、「調理場・食物貯蔵室」、「地下貯蔵室」、「婦人部屋」にかけられた費用と、宮廷支出全体の減少である。一方で馬の飼料であるカラスムギの購入や装蹄にかかった費用、使者や士官、手工業者への支払いなどが維持ないし増加しているのは、ザクセンの政治的分裂が進められていく中で両支配家ともに軍事外交部門を強化していく必要が生じたためであろう。

諸項目の中でとくに注目されるのが、「ライブツィヒ大市」に対して宮廷支出が占める割合の顕著な増加である。これは、宮廷によるライブツィヒの大市での商品購入額が増加したことを示している。大市は、ザクセン地方の生産物を販売する場であったと同時に、遠隔地から得られるさまざまな高級品を購入する機会も提供していた。そしてその大口の顧客は宮廷であり、奢侈品購入を目的とする大市訪問はザクセン宮廷の年中行事のひとつに数えられていた(Sohl, 1997, 212)。衣服、装身具、装飾品、高級毛織物や絹などが、ライブツィヒおよび各

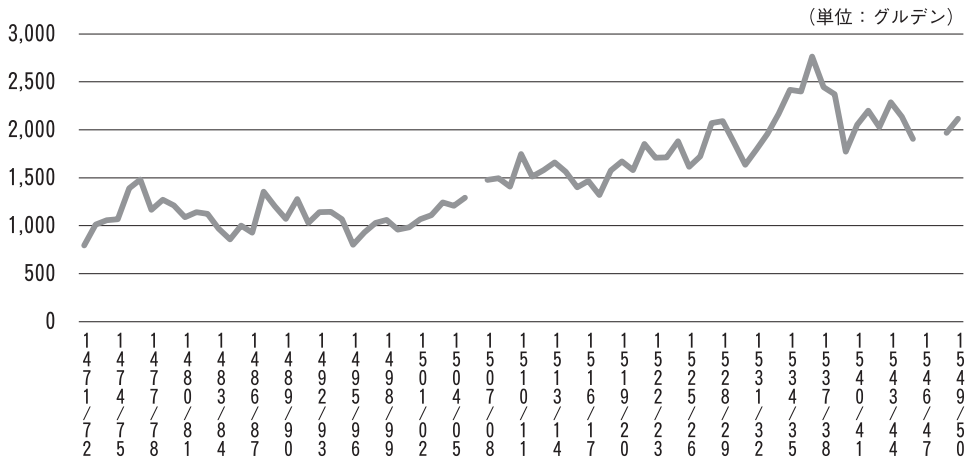
地より大市を訪れる商人から宮廷に購入された記録が多数残されている。領邦君主財政におけるライプツィヒ大市での多額の支出はそれ以降も続いていた (Schirmer, 2006, 127-128)。銀山開発により増大した領邦財政収入は、宮廷の奢侈消費支出に結びつき、ライプツィヒの大市はその取引の場となったのである。

本節(1)で言及したように、特定の時期を除いて領邦君主が鉱山の産出銀をライプツィヒ市場に直接売り出すことは基本的に抑制されていた。しかし、奢侈品購入のための支払いという形で、獲得された銀は大市取引に流れ込んでいたと考えられる。これは、大市での奢侈品取引の活性化にとどまらない経済的成果をライプツィヒにもたらしたのである。すなわち、潤沢な資本(貨幣)の流入は、大市の金融機能の基盤となり得た。R. リュプケは、「15世紀末にザクセンで多くの銀鉱床が発見されたことよって、商人たちには資本の形成と投下、投機や投資——つまり銀行業の基盤——の新たな可能性が開けることとなった」(Lübke, 1997, 198)と述べているが、銀山開発が商人の資本形成・投下という結果となるまでの具体的経路のひとつとして、実際に多くの銀を手に入れたザクセン宮廷による旺盛な消費支出が重要であったことは明記すべきである。

さらにザクセンの領邦君主財政は、より直接的な仕方で金融面におけるライプツィヒ大市の機能強化に貢献した。すなわち、大市を決済地として利用することで、その発達を促したのである。当時のザクセン宮廷では会計決算のための機構は整っていなかったため、その役割は15世紀末に超地域的な重要性をもつ年市であるライプツィヒとナウムブルクの年市によって担われることになった。決算は当初年4回で実施されており、3回のライプツィヒ大市と1回のナウムブルク大市がそれぞれにあてられた。のちにそれは半年あるいは年に1回となる。大市では宮廷の負債が支払われたと同時に、新たな信用供与もなされた。さらに、銀山からの収益が領邦の中央会計に振り込まれていた。これら諸々の業務は、上述した宮廷による大市での商品購入と連動して行われていた (Schirmer, 1999, 96-98)。以上のように、領邦君主財政は大市における商品取引と金融業務の両面における発展に深くかかわっており、その土台となったのが銀山開発であったといえる。

## おわりに

本稿の背景にある問題意識は、近世になってライプツィヒの大市が国際的な重要性を得るようになったのはなぜなのか、であった。大きな構造的条件は、経済の発展の仕方がヨーロッパの東西で大きく異なっていた状況において、双方を商業的に結びつけるためには、「旧式」の取引制度である定期市のシステムがとられる必要があったことであろう。それでは、いかなる理由で他の大市都市ではなくライプツィヒが成長したのであるだろうか。この問いに対しては、これまでの研究でさまざまな要因が挙げられてきた。領邦政策のほか、商品取引・物流や支払い



(出所) Straube, 2015a.

図2 計量手数料収入の推移

・決済といった商業機能、さらに15世紀後半から16世紀にかけてのザクセンにおける鉱山業の発達などが指摘されている。本稿は、最後に挙げた要因がどのような役割を果たしたのかを検討した。

ザクセン銀山開発の重要性は、かねてより認識されてはいた。しかし、それが具体的にどのような形でライプツィヒ大市の飛躍に結びついたのかについては、包括的な考察は十分ではなかった。本稿は、考えられる諸要因を整理して因果の経路を説明し、商品取引・物流面や支払い・決済面での発展と結びつけることを試みた。その結果を以下にまとめたい。

鉱山で産出された銀の買い上げ権を有していた領邦君主は、貨幣政策上の観点から、大市で銀を直接販売することは抑制していた。とはいえ、それは皆無というわけではなかった。また、より重要であったのは、銀の販売取引を通じて、外部の商人、とりわけニュルンベルク商人との関係が強化されたことである。これによって、バルヘントや金属加工品といったニュルンベルクの工業製品のほか、ヴェネツィアなどの地中海都市から輸入される物産の交易が活性化し、さらには南ドイツ資本の進出、取引技術の移転などが起こったと考えられる。

エルツ地方の銀山開発によって、当該地域には特異な人口増加が生じた。それまで人口がまばらであった山地に、鉱山業から得られる利益を求めて短期間のうちに多くの人びとが流入したのである。それは、地域の人口扶養能力の向上による自然増とは性格を異にした動きであり、域内での食糧・物資供給力は人口成長に追いつくことができなかった。そのため、都市および市のネットワークを通じた外部からの供給が必要になる。このことは、ライプツィヒの市場機能を高める結果となったであろう。

銀山から得られる収益は、ザクセン領邦君主財政の重要部分を占めるようになった。15世紀末に財政支出は何に向けられていたのか目を向けると、ライプツィヒの大市における商品購入



が大きな割合を占めるようになっていったことが注目される。宮廷における消費のための奢侈品を購入する場が、ライプツィヒの大市であったのである。これは大市における商品取引の発達に貢献したほか、領邦財政にストックされたザクセン銀が支払いにより市場に供され、蓄積・流通していったことも意味する。また、宮廷による大市の定期的利用は、商品購入目的にとどまらなかった。これと連動する形で、財政決算もなされていたのである。領邦宮廷は銀山の収益を大市での支払いに向け、反対に銀山からあがった収益は大市を通じて領邦会計へと振り込まれた。銀山開発により財政基盤を得た領邦という大口の利用者が支払い・決済のリズムに加わったことは、大市の金融機能の強化に結びついたと考えられる。

以上の諸要素が、ライプツィヒ大市の成長にどの程度関連していたのかを実証することは難しい。単純に時間的な前後関係を確認するのみにとどめたい。図2には、大市取引商品に対する「計量手数料」の収入の推移が示されている。これは商品取引規模の指標となるが、その動きを本稿でみた銀生産の発展と照合してみれば、15世紀末から16世紀初頭にかけて銀産出量の急速な増加が起こったのちに、16世紀前半に大市商品交易が拡大していたことがわかる。いずれにせよ、銀山の開発が、商品取引・交易部門と支払い・決済部門双方の発展に作用することによって、ライプツィヒ大市の成長を促したことは明らかであろう。

#### [付記]

本研究は、JSPS 科研費（課題番号16H01953）の助成を受けたものである。

#### 参考文献

- Ammann, H. (1970), *Die wirtschaftliche Stellung der Reichsstadt Nürnberg im Spätmittelalter*, Nürnberg: Verein für Geschichte der Stadt Nürnberg.
- Beddies, Th. (1996), *Becken und Geschütze. Der Harz und sein nördliches Vorland als Metallgewerbelandschaft in Mittelalter und früher Neuzeit*, Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Blaschke, K. (1967), *Bevölkerungsgeschichte von Sachsen bis zur Industriellen Revolution*, Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger.
- (1999), “Die Kurfürsten von Sachsen als Förderer der Leipziger Messe. Von der landesgeschichtlichen Grundlegung zur kontinentalen Wirkung,” in H. Zwahr, Th. Topfstedt und G. Bentele (Hrsg.), *Leipzigs Messen 1497 1997*, 1, Köln: Böhlau, S. 61 73.
- Brübach, N. (1994), *Die Reichsmessen von Frankfurt am Main, Leipzig und Braunschweig*, Stuttgart: Steiner.
- Denzel, M. A. (1999), “Zahlungsverkehr auf den Leipziger Messen vom 17. bis 19. Jahrhundert,” in H. Zwahr, Th. Topfstedt und G. Bentele (Hrsg.), *Leipzigs Messen 1497 1997*, 1, Köln: Böhlau, S. 149 165.
- (2012), “Messestadt Leipzig: Marktplatz Europas in der Frühen Neuzeit,” in S. Schötz (Hrsg.), *Leipzigs Wirtschaft in Vergangenheit und Gegenwart. Akteure, Handlungsspielräume, Wirkungen (1400 2011)*, Leipzig: Leipziger Universitätsverlag, S. 95 106.
- (2018), “Das System der Messen in Europa Rückgrat des Handels, Zahlungsverkehrs

- und der Kommunikation (9. bis 19. Jahrhundert),” in M. Denzel (Hrsg.), *Europäische Messegeschichte 9. 19. Jahrhundert*, Köln: Böhlau, S. 353 431.
- Dieterich, R. (1991), *Untersuchungen zum Frühkapitalismus im mitteldeutschen Erzbergbau und Metallhandel*, Hildesheim: Olms (Neudruck von 1958, 1959 und 1961).
- Fischer, G. (1929), *Aus zwei Jahrhunderten Leipziger Handelsgeschichte 1470 1650 (Die kaufmännische Einwanderung und ihre Auswirkungen)*, Leipzig: Felix Meiner.
- Groß, R. (2012), *Geschichte Sachsens*, 5. Aufl., Leipzig, Seemann Henschel.
- Henn, V. (1996), “Missglückte Messegründungen des 14. und 15. Jahrhunderts,” in P. Johaneck und H. Stoob (Hrsg.), *Europäische Messen und Märktesysteme in Mittelalter und Neuzeit*, Köln: Böhlau, 205 222.
- Ingenhaeff, W./Bair, J. (2010), “Berggeschrei Massenmedium ohne Print und Elektronik (?)”, in W. Ingenhaeff/J. Bair (Hrsg.), *Bergbau und Berggeschrey. Zu den Ursprüngen europäischer Bergwerke*, Hall in Tirol: Berenkamp, 29 37.
- Kellenbenz, H. (1977), *Deutsche Wirtschaftsgeschichte. Band I: Von den Anfängen bis zum Ende des 18. Jahrhunderts*, München: C. H. Beck.
- Kroker, E. (1909), “Leipzig und die sächsischen Bergwerke,” *Schriften des Vereins für die Geschichte Leipzigs*, 9, 25 64.
- (1925), *Handelsgeschichte der Stadt Leipzig. Die Entwicklung des Leipziger Handels und der Leipziger Messen von der Gründung der Stadt bis auf die Gegenwart*, Leipzig: Walter Bielefeld.
- Laube, A. (1976), *Studien über den erzgebirgischen Silberbergbau von 1470 bis 1546*, Berlin: Akademie Verlag.
- Lübke, R. (1997), “Banken und Wechselstuben,” in V. Rodekamp (Hrsg.), Leipzig. Stadt der Wa(h)ren Wunder. 500 Jahre Reichsmesseprivileg, Leipzig: Leipziger Messe Verlag, 198 200.
- Lütge, F. (1967), “Der Handel Nürnbergs nach dem Osten im 15. / 16. Jahrhundert,” in Stadtarchiv Nürnberg (Hrsg.), *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte Nürnbergs*, Band 1, Nürnberg: Stadtrat, S. 318 376.
- Schirmer, U. (1999), “Die Leipziger Messen in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts. Ihre Funktion als Silberhandels und Finanzplatz der Kurfürsten von Sachsen,” in H. Zwahr, Th. Topfstedt und G. Bentele (Hrsg.), *Leipzigs Messen 1497 1997*, 1, Köln: Böhlau, S. 87 107.
- (2006), *Kursächsische Staatsfinanzen (1456 1656). Strukturen Verfassung Funktionseliten*, Stuttgart: Steiner.
- Schneider, J. (1989), “Die Bedeutung von Kontoren, Faktoreien, Stützpunkten (von Kompagnien), Märkten, Messen und Börsen im Mittelalter und Früher Neuzeit,” in H. Pohl (Hrsg.), *Die Bedeutung der Kommunikation für Wirtschaft und Gesellschaft*, Stuttgart: Steiner, S. 37 63.
- (1991), “Messen, Banken und Börsen (15. 18. Jahrhundert),” *Banchi pubblici, banchi privati e monti di pieta nell’Europa preindustriale. Amministrazione, tecniche operative e ruoli economici. Atti del convegno Genova, 1 6 ottobre 1990*, 1, Genova: Societa ligure di storia patria, pp. 133 170.
- Sohl, K. (1997), “Des Hofes »Supermarkt«,” in V. Rodekamp (Hrsg.), *Leipzig. Stadt der Wa(h)ren Wunder. 500 Jahre Reichsmesseprivileg*, Leipzig: Leipziger Messe Verlag, S.

212.

- Straube, M. (1979), "Zur Stellung der Leipziger Messen im überregionalen Warenverkehr zu Beginn des 16. Jahrhunderts," *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, 1979/ , S. 185 205.
- (1997a), "Europäische Handelswaren auf dem Wege von und zu den Leipziger Märkten um 1500," in V. Rodekamp (Hrsg.), *Leipzig. Stadt der Wa(h)ren Wunder. 500 Jahre Reichsmesseprivileg*, Leipzig: Leipziger Messe Verlag, S. 21 30.
- (1997b), "Notwendigkeiten, Umfang und Herkunft von Nahrungsmittellieferungen in das sächsische Erzgebirge zu Beginn des 16. Jahrhunderts," in E. Westermann (Hrsg.), *Bergbaureviere als Verbrauchszentren im vorindustriellen Europa. Fallstudien zu Beschaffung und Verbrauch von Lebensmitteln sowie Roh und Hilfsstoffen (13. 18. Jahrhundert)*, Stuttgart: Steiner, S. 203 220.
- (2015a), *Wirtschaftliche Frequenzen der Leipziger Großen Märkte/Messen. Statistische Zeugnisse aus den Leipziger Stadtrechnungen 1471/72 bis 1814/15*, Leipzig: Leipziger Universitätsverlag.
- (2015b), *Geleitswesen und Warenverkehr im thüringisch sächsischen Raum zu Beginn der Frühen Neuzeit*, Köln: Böhlau.
- Unger, M. (1963), *Stadtgemeinde und Bergwesen Freibergs im Mittelalter*, Weimar: Verlag Hermann Böhlau Nachfolger.
- Verlinden, O. (1963), "Markets and Fairs," in M. M. Postan and E. E. Rich (eds.), *The Cambridge Economic History of Europe*, 3, pp. 119 153.
- Wagenbreth, O. / Wächtler, E. (Hrsg.) (1990), *Bergbau im Erzgebirge. Technische Denkmale und Geschichte*, Leipzig: Springer Spektrum.
- ウーバー, M. [黒正巖・青山秀夫訳] (1955) 『一般社会経済史要論下巻』岩波書店 (原著 1924年)。  
ノース, D. C., トマス, R. P. (2014) [速水融 / 穂本洋哉訳] 『西欧世界の勃興 新しい経済史の試み 新装版』ミネルヴァ書房 (原著 1973年)。
- 瀬原義生 (2011a) 「中世ニュルンベルクの国際商業の展開」『立命館文学』第620号, 989 978頁。  
— (2011b) 「中世ニュルンベルクの国際商業の展開 (続)」『立命館文学』第621号, 1226 1210頁。  
— (2016) 『中・近世ドイツ鉱山業と新大陸銀』文理閣。
- 谷澤毅 (2000) 「商都ライプツィヒの興隆と大市 商業史的概観」『長崎県立大学論集』第33巻第4号, 1 25頁。  
— (2002) 「ライプツィヒの通商網 ドイツ・中欧における内陸商業の展開」深沢克己 (編著) 『国際商業』ミネルヴァ書房, 21 49頁。  
— (2010) 「近世ドイツ・中欧の大市 内陸商業の結節点」山田雅彦 (編) 『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』清文堂, 175 198頁。
- プレシ, A., フェルターク, O. [高橋清徳編訳] (2000) 『交易のヨーロッパ史 物・人・市場・ルート』東洋書林 (原著 1991年)
- ブローデル, F. [山本淳一訳] (1986) 『物質文明・経済・資本主義 15 18世紀 2 1: 交換のはたらき 1』みすず書房 (原著 1979年)。